

# 昆虫採集に思う

## 1. はじめに



「昆虫採集ごときで、昆虫は減らない。開発による自然破壊がはるかに重大だ」という意見と「いや、自然破壊で減っている時代だからこそ、わずかな採集でも減少につながるんだ」という意見があります。どちらも正しいようですが、これは、繁殖力の旺盛な種と絶滅の危機のある種を同列に扱ってしまったための誤解によるもののようです。また、昆虫採集反対の論拠は「採ったら、減るから」だといえます。反対論者は直ぐ昆虫がトキみたいなることを思い描くようですが、昆虫は少々採っても復元力がものすごいんです。実際、昆虫がトキのような運命をたどったら、そのときはもう地球は終わりなのです。

## 2. 昆虫採集にはどんなメリットがあるか

私自身は、現在昆虫採集はやってませんが、昆虫採集賛成派です。今、子供たちは、熟通い、屋内での電子ゲーム、与えられる一方の映像あるいは親が先回りして子供たちの欲望までも先取りしてしまう生活などによって、子供の能動性も活力も全く閉じ込められています。

自然の中では、それが自然に解き放たれるように思います。自然に触れて、遊び育つことは高い能動性を要求されます。その能動性は子供達に多くの優れた能力を触発しますが、それは子供達に内発する強い活力に支えられています。

自然に親しんで欲しいのは、都会の子供たちだけではありません。田舎に住んでいる子供たちも自然に接していると思ったら間違いで、田舎の子供も家にこもっているため、自然との接触が少ないのです。私達は、自然教育というと、すぐ理科教育と結び付けてしまいますが、自然というのは

- (1) 美意識や豊かな感性を育てる場所であり、
- (2) 自然を体験することで、子供たちは自分より大きい生命の存在を知るようになります。

皆さんご存知ですか？日本の子供の個室率は世界一だそうです。部屋の中は、漫画本が山積みされ、テレビゲームやオーディオが占有しています。一人遊びが過剰で、しかも、人間以外の「もの」とのコミュニケーションが中心になっています。これでは子供たちの社会性などは育っていきませんね。

子供たちはみな潜在的に生きる力を持っているわけですから、子供たちの野性的な力を引き出してやる必要があります。各地の学校で自然体験の試みがもう10年以上続いているようですが、その成果は大きいようです。

さて、子供たちが、昆虫採集をすることによって、知らず知らずのうちに身につけるものがあります。それは、

(1) 昆虫が住む環境や昆虫の習性、それらに関連した自然界の仕組みなどが子供なりに分かってきます。

(2) 昆虫採集は、やればやるほど分からないことが沢山出てきて興味が尽きません。例えば、蝶のみでなく、蛾の分野にまで手を出すと収拾不可能になることを早い時期に知ることになります。すなわち、自然は複雑で多様性に富み、情報量が多いことを知ります。

(3) 人間にできる採集の範囲は何処までかを、文献調査などをやって、理屈にかなった解答を見つけるために、子供なりの大変な努力をすることがあります。つまり、自分の管理能力を超えそうなところまでやってみることがあります。そのときに子供は大きく飛躍します。

(4) さらに、昆虫を詳しく観察することによって、驚きや感動、更には畏敬の念など人間が持っている独特の崇高な感情が刺激を受けます。

これらが、有機的に組み合わさってはじめて、

(1) 自分の身の回りの環境はどのようなものかを考え始め、

(2) 昆虫が育つ環境がどのように変化しているかについて疑問を持ち始め、

(3) 人間を含む自然界にまで視野を広げて、その仕組みはどうなっているかを注意深く見つめはじめ、

(4) 自然界の仕組みはどうあるべきかを子供なりに考え始め、

(5) 自然界のあるべき理想はどのようにしたら達成できるかを子供なりに本気で考えるようになる、

などの科学的な考察ができる次の世代が育つのではないのでしょうか。

昆虫採集をやっていて、図鑑では見ていたが、実際に見たのは初めてという虫に出会った時、「口から心臓が飛び出すような興奮」を覚えますが、これを、子供たちにも実際に体験して欲しいと思っています。

### 3. 昆虫たちが減っていく本当の犯人は？



ところで、山や森、林から虫が消えていくのは、人が採集するからというよりも、環境が変わって、昆虫達が棲め

なくなっているというのが現状なのです。

そこで、昆虫の交通事故について考えてみましょう。最近では、山の奥まで道路は舗装され、昆虫採集でいなくなる昆虫よりも、交通事故でなくなる昆虫の方が多いと言われています。山の中を走る綺麗な舗装道路で、一度車を降りてしばらく歩いてみてください。多くの昆虫の亡がらを見ることができます(左の写真)。

多くの方は、高速道路をよく利用すると思いますが、1日走っただけで、車の前面が虫だらけになって、それを取り除くのに大変な苦勞をしたという方は多いと思います。私自身、高速道路を走るたびに、車のフロントを眺めながら、今日は何匹の昆虫を死に追いやったろうかと思うことがあります。私の車1台でも大した数です。高速道路で走っている車は、ボディーの流線に沿って後ろに追いやられる昆虫を除いて、前面にいる昆虫を絶えず押しつぶしながら進むことになるわけですから、死んでいく昆虫は数知れないはずですよ。

ちょっと、概算してみましょう。

1台の車にこびりついている昆虫の死体を約100匹(車体から落ちた分も含めて)としましょう。全国の高速道路では1日平均700万台が通行していますから、最も昆虫の活動が激しい5~9月の間であれば、700万台/日×100匹/台=7億匹/日、すなわち単純に計算すれば、この時期には、1日平均7億匹の昆虫が命を落とすことになります。その他、日本には高速道路に近いスピードで走れる道路が沢山ありますから、その数はゆうに10億匹は越えるでしょう。そのうち半分は雨の日と考えれば、5億匹と考えてもよいでしょう。ちょっと、過大評価の感も無きにしもあらずですが、名前も分からないような小形の昆虫がほとんどだとしても、この数は大変な数になります。彼らとて、生態系の一員ですから、彼らの減少が生態系に影響を与えないとは思われません。昆虫採集でこれほどの昆虫を採集できるでしょうか。

昆虫の減少は

- ①交通事故、
- ②宅地開発、
- ③ゴルフ場建設、
- ④里山の荒廃など

といった棲息環境の悪化などが主原因で、絶滅危惧種の保護は勿論大切ですが、その他の繁殖力の旺盛な種の昆虫採集による昆虫の減少など取るに足らないのです。つまり、環境の変化は非常に大きくて、その変化のスケールに比べたら、昆虫採集のスケールなど問題になりません。

変化のスケールの大きい、しかもコントロールの出来ない昆虫達の交通事故死、宅

地開発、ゴルフ場建設、里山の荒廃などの問題は議論しないで括弧に入れておいて、コントロールが比較的容易な物言わぬ昆虫採集をする人達に非難を浴びせて、問題が解決されればいいのですが、問題のすり替えで、ことが解決するとはとても思われません。自分に理解の出来ない他人の楽しみは許せないというのも大人気ないですね。

マスコミなどは、「昆虫採集禁止を国民が求めているからそういう報道の仕方をするんだ」という議論があります。確かに、日本では横並びで、「採ってはいけない」となると、誰でも採ってはいけないということになります。いっぺん、そう決められると後はもう役人の世界です。いくつかの新聞で、昆虫採集禁止の報道を見ましたが、本質を議論した新聞など見たことがありません。

「昆虫を採集をする人はいなくなったけれども、やはり昆虫も減ってしまった。主な原因は、昆虫採集ではなかった」ということのないように、感情論に走らずに解決する方法はないものでしょうか。

残念ながら、今では昆虫採集をする子供たちの方は絶滅寸前で、大人の昆虫愛好家が細々と昆虫採集を行なっているというのが現状です。

#### 4. 高速道路で何が起きているか



高速道路が出来ると、昆虫だけでなく、その周辺に棲む動物たちも交通事故に遭います。高速道路で事故に遭いやすい動物を日本道路公団の最近の(1995年、2003年の記録など)記録から見てみましょう。

下図のように、タヌキの死亡例がずば抜けて多いのが分かります。夜行性のタヌキは自動車のライトにすくんでしまう習性があるので事故に遭遇しやすいといわれています。ネコが2位なのも同じ理由からです。

飛ぶ鳥のトビが5位、カラスが8位というのは意外に思うかもしれませんが、彼らが事故にあうのは、車にはねられて死んだ動物の肉を食べるからです。

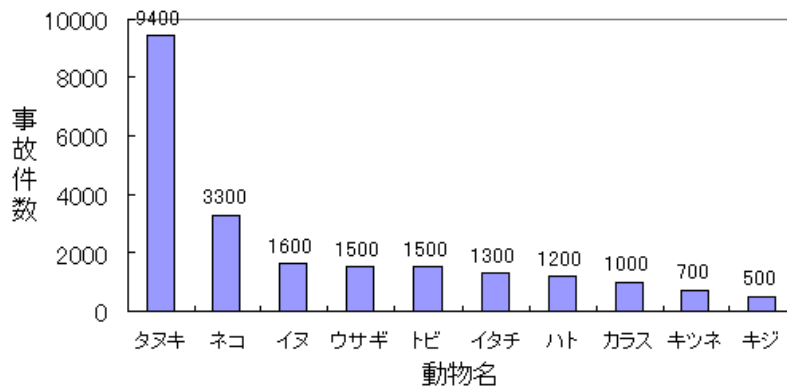
動物の犠牲が多いのは、道路が造られても、動物たちは今まで通りの同じルートを通るからです。

こうした事故をなくそうと、高速道路の下に、沢山のトンネルを作っています。多いところでは、30kmに100近くのトンネルがあります。300mにトンネル1個の割合です。

このようにして、トンネルを作っても、動物たちが通るトンネルは限られているそうです。

また、アスファルト道路の両サイドに雨水を逃すU字管を設けますが、このU字管は、動物や昆虫たちにとっては、死活問題にも繋がっています。動物では蛇や亀、飛べない昆虫たちがこの溝に落ちてしまえば、脱出が困難になるからです。

高速道路における動物の交通事故



高速道路における動物の交通事故件数

蝶の撮影をしていると、こんな場所が沢山あって、動物や昆虫たちの亡骸が多く見られます。環境アセスメントは実施されているのでしょうか。彼らは「長年に渡る環境調査や研究の成果を駆使し、コンピュータを使って可成り正確な予測が出来るようになった」といいます。

また、「自然環境への影響、とくに動植物の実態調査は綿密に行っている」といいます。すなわち、どんな植物が分布しているかの植物調査を目で確かめています。動物も同じですね。たとえば、鳥などは歩きながら、目と耳で姿や鳴き声を確認し、どんな種類が棲息しているかを調べます。哺乳類の場合であれば、食べ物や足跡、糞を見つけて生息状況を調べます。ここまでは、誰にでも分かりますし、確かにやっているようですが、この後の現場の状況と環境影響評価書との関連が不明朗です。つまり、工事のやりっぱなしで彼らは調査結果にフィードバックを掛けていないのです。この点が大きく抜け落ちているのです。

U字管のような構造物で、動物たちや昆虫たちの亡骸を沢山見ていると、自然環境への影響、とくに動植物への影響について、工事関係者が、どの程度の精度で真剣に取り組んで工事を進めているのかが疑問でなりません。